



羅針盤

中川 秀己

Hidemi Nakagawa

東京慈恵会医科大学皮膚科学講座 主任教授



「格物致知」の皮膚科診療

今回、退任にあたって編集部より特集号のご依頼を頂きました。退任の日に合わせて発刊して頂くとのことで大変光栄なことであり、喜んでお引き受けすることにしました。内容は大学のスタッフと相談して、私の印象に残り（または強い）、かつ東京慈恵会医科大学皮膚科の各専門外来の興味深い症例に的を絞ることにしました。私の専門分野以外からの症例はカンファランス、学会発表などで印象に残った症例です。

私が入局した40年前の東京大学医学部皮膚科は北病棟11階が病棟、現在の医局棟が外来棟でした。入局して一番はじめは病棟勤務でしたが、右も左もわからない状態でした。先輩は基本は教えてくれましたが、「自分で勉強して考えなさい」と言われ、ベテラン看護師さんに厳しく鍛えられて、少しずつ一人前に育っていった気がします。

外来は月曜から土曜まであり、夏は1日400名の患者が押し寄せる日も多く、診断がむずかしい患者さんは午後まで待ってもらい、数名の指導医の先生の診察を受けてから診断がなされ、必要な検査（生検・手術など）はわれわれが担当しました。各得意分野を持つ指導医の先生方の眼光・洞察力は鋭く、次々と正確な診断が付けられることに驚きましたが、まさにこれが皮膚科臨床の醍醐味でした。

その後、当時の教授の久木田淳先生（昭23卒）、分院の助教授の堀嘉昭先生（昭35卒）に勧められ、電子顕微鏡で皮膚疾患の色素細胞の研究を始め、ハーバード大学の基幹病院MGHで色素細胞研究を2年半行うことになりました。この間、高名なFitzpatrick教授たちから、臨床・研究の真摯なマインドの勉強をさせていただいた

ことが今になって教室員の指導に大いに役立っています。

帰国後は東大に戻り、石橋康正教授（昭34卒）、玉置邦彦教授（昭48卒）の指導の下で乾癬、アトピー性皮膚炎などの専門外来を務めさせて頂きました。入局2年目から学生の臨床実習の指導を任せられましたが、学生と一緒に患者を診察し、手術するときには大いに助けてもらいました。

羅針盤のタイトルに掲げた「格物致知」とは古代中国の言葉で、「物事の道理や本質を深く追求し理解して、知識や学問を深め得ること」です。私も先輩からの指導に加え、自らが後輩、医学生の指導を行うことで、皮膚科臨床の「格物致知」に少しだけでも近づいたのではないかと自負しています。私が長年皮膚科に携わって得たノウハウを少しでも伝えていくのが使命だと信じ、教室員の指導をしてきたつもりです。

東京慈恵会医科大学学祖の高木兼寛先生の有名な言葉に、本特集のサブタイトルとしても使わせていただいた「病気を診ずして病人を診よ」があります。これは、患者さんがご自身の病気において、どのような悩みを抱えているのかを掴むことの大切さを示していると思います。

また、私の好きなもう一つの学祖の言葉に「地霊人傑」があります。これは「風土、人物ともにずば抜けて立派で、土地柄、人柄がともにすぐれている」という意味です。「地霊」から沢山のことを学び、活用し、それを伝統の叡智として次の世代に伝えていくためには、われわれ自身が真摯な気持ちで皮膚科臨床に取り組む「地霊」となり、「人傑」を育成し、次世代に繋いでいくことが大切ではないかと愚考しています。